Okinawa Prefectural College of Nursing

沖縄県立看護大学紀要第３号(2002年３月)

報告

沖縄県離島におけるPhotovoiceの試み

－参加型 Needs Assessment としての応用－

岡村　純[1)]　金城芳秀[1)]

PhotovoiceはWangらによって提唱された参加型アクションリサーチアプローチで、住民が一定のテーマで写真を撮影し、その写真に「ボイス」を付け、グループ討議することによって課題を共有化し、解決方法を住民自らが発見するものである。Photovoiceの方法について文献的検討を行なった結果、①参加者はグループ討議の内容を想定して選択する、②様々な視点からの写真を確保するために、参加者の偏りを避けたり、家族や隣人による写真を採用するなどの工夫をする、③被写体の指示や技術的な助言は最小限にして、独創性が発揮できるようにする、④グループ討議は支持的な調子で進め、研究者などが外部ファシリテーターとして参加する、⑤議論を活発にするため、スライドにして視覚的インパクトを高める、地域の異なる写真も討議することなどを工夫する、という特徴が明らかになった。沖縄県離島での試みからは、子どもの参加するPhotovoiceは①質的な診断となり得る、②解決策に向けた手法である、③住民の様々な参加が可能である、④ニーズの掘り起こしが可能であることが明らかになり、とくに参加の受け皿となる住民組織がない、あるいは不活発な場合には有効な方法であると考えられた。

キーワード：Photovoice、住民参加、アクションリサーチ、Needs　Assessment

Ⅰ　はじめに―課題設定―

Photovoiceは1996年にミシガン大学のWangらによって提唱された参加型アクションリサーチアプローチである[1)]。そのアプローチは、住民が一定のテーマで写真を撮影し、その写真に「ボイス」を付けグループ討議することによって、課題を共有化し、解決方法を住民自らが発見するものである。その目的は、①住民による個人や地域の資源、関心の記録を可能にする、②写真のグループ討議を通じて、批判的対話を高め問題に関する知識を増やす、③政策立案者を動かす、とされており、とくに社会的弱者の社会参加やNeeds　Assessmentの手法[2)]としても活用されている。

日本においては、Photovoiceについての紹介や実践がほとんど行なわれていないので、海外の文献から方法論的検討を行なうとともに、われわれが沖縄県離島において試みている事例を通して、その応用可能性を検討する。

Ⅱ　Photovoiceに関する文献的検討

１．エンパーワーメント教育としての活用

―C. Wang, M. A. Burris：Empowerment through Photo Novella: Portraits of Participation[3)]―

Photovoiceの先駆け（当時はPhoto　Novellaと呼ぶ）となったこの論文において、WangらはPhoto Novellaの基盤にはFreire理論を応用したエンパーワーメント教育、フェミニスト理論、ドキュメンタリー写真術の三つがあることをまず述べている。

このPhoto Novellaは中国雲南省の２県で行なわれた女性のリプロダクティブヘルスと開発プログラムの一環として実施され、その第１ステップは農家女性の写真と議論から政策的な問いを抽出する指導グループを様々な分野の指導者から構成することである。Photo Novellaの参加者は婦人会９人、各村を代表する農家女性53人で、後者は年齢、学歴、経済状態、単身・既婚、民族が考慮されている。参加者はPhoto Novellaの技術とプロセスについて集中的な訓練を受ける。

ファシリテーターをつけたグループ討論で女性は写真の“声”を共有し、他県の写真についても議論することによって女性だけでなく、男性とも子どもともイメージを共有する。このようなプロセスのなかで“声”を表現する撮影術もエンパーワーメントされる。Photo Novellaは女性が自分自身のために話す能力をエンパーワーメントする過程を通して政策の変化を容易にした。写真の展示を通して、女性の考えと願いは熱烈な聴衆を得ることができる。

以上、この論文から読み取れる方法的な留意点は①参加者の偏りを避ける、②事前に訓練を行なう、③グルー

1）沖縄県立看護大学

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

プ討議にファシリテーターをおく、④地域の異なる写真も討議する、⑤展示によって“声”をひろげる、である。

２．参加型Needs Assessmentとしての活用

—C. Wang, M. A. Burris：Photovoice: Concept, Methodology, and Use for Participatory Needs Assessment[2]—

この論文は、Photovoiceの参加型Needs Assessmentとしての価値を、中国雲南省でのプロジェクトを事例に、理念、長所・短所、鍵となる要素、素材・資源などの点から検討したものである。

Photovoiceを参加型Needs Assessmentに適用するためには、Photovoiceの訓練が必要で、カメラ使用のメカニカルな側面についてのカリキュラムが行なわれる。ただし、住民の創造性の発揮を損なわないように、技術的な助言は最小限にすべきである。

写真をスライドにすることはグループディスカッションを容易にし、視覚的インパクトを大きくする。参加者はディスカッションを通じて、自分の感情を表現するだけでなく、多くの人々の気持を表したくなる。ファシリテーターと参加者は議論に支持的なトーンを示すことで、お互いのかかわりは“ためらいがち”から“熱狂的”なものに育つ。

参加者はNeeds Assessmentにおいて、①選択（地域のニーズを最も的確に反映している写真を選ぶ）、②コンテクスト化（写真の意味するところを物語にする）、③コード化（問題、テーマ、理論を同定する）という３つの段階に関与する。

以上、この論文が扱っている方法的な記述は①カメラ使用の訓練を行なう、②独創性を発揮させるため技術的な助言は最小限に抑える、③スライド化で視覚的インパクトを高める、④議論を支持的なトーンで進める、である。

３．参加型ヘルスプロモーションとしての活用

—C. Wang, Wu Kun Yi, Zhan Wen Tao, K. Carovano: Photovoice as a participatory health promotion strategy[4]—

この論文は、中国雲南省でのプロジェクトを事例に、Photovoiceを参加という視点から検討したものである。Photovoiceの段階別に住民の参加を抜き出すと**表１**のようになる。

一般住民の参加するPhotovoiceの段階では、撮影は参加者本人だけでなく、家族や隣人も行なっている。グループディスカッションには、外部と内部のファシリテーターが可能で、雲南省の事例では外部は外人のテクニカルアドバイザー、内部は地方婦人会の中心メンバーや農村女性である。

表１　雲南省女性のリプロダクティブヘルスと開発プログラムへの参加者—Photovoiceの段階別—

Photovoiceの段階	参加者			
	農村女性	中国女性連合		
		町	県	省
問題の概念化				
目標と対象の定義				
場所の選定				
方法論の選定				
資金の確保				
トレナーの訓練				
参加者の選定とリクルート		○	○	
方法と分析の実施				
Photovoice訓練の実行				
撮影の開始テーマの案出		○	○	
撮影	○			
ｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝのﾌｧｼﾘﾃｲﾄ	○			
批判的感想と対話				
議論のための写真の選択	○	○	○	
コンテクスト・物語化	○	○	○	
問題、ﾃｰﾏ、理論のｺｰﾄﾞ化	○	○	○	
物語の書き下ろし	○	○	○	
フォーマティブな評価の実施				
調査結果の普及				
ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝのためのｽﾗｲﾄﾞと物語の選択				
地域でのﾌﾟﾚｾﾞﾝの実施	○			
会議でのﾌﾟﾚｾﾞﾝの実施				
雑誌論文の執筆				○
政策のアドボケイト				
政策立案者のリクルート				
政策立案者を動かす				○
政策上の意思決定	○			
政策の施行		○		
参加型アウトカム評価の実施	○			○

物語化のためには、頭文字SHOWeDの５つの質問、①何をみる（See）のか？②何が起こっている（Happening）のか？③われわれ（Our）の生活にどう関係するのか？④この問題はなぜ（Why）存在するのか？⑤われわれは何ができる（Do）のか？、が使われる。

Photovoiceは自分たちのNeedsを政策立案者に例示できるので、雲南省ではデイケアセンターや助産婦プログラム、奨学金制度などがすでに開始されている。一枚の写真、例えば野外での家族計画教育の１ショットはこのプログラムの問題点と改善点を示唆するものとなっている。

以上、この論文では方法的には、①参加者だけでなく、

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

その家族や隣人による写真を認めている、②参加者内部からもファシリテーターを採用した、③物語化のために５つの問いを準備した、④Photovoiceの地域プレゼンテーションを参加者に行なわせた、⑤写真をプロジェクトのアウトカム評価に活用した、ことが付け加えられている。

４．世代間相互理解の方法としての応用

—C. M. Killion, C. Wang：Linking African American Mothers across Life Stage and Station through Photovoice[5]—

この論文は、Photovoiceを用いて、アフリカ系米人の若い女性ホームレスと住宅居住の高齢者女性との相互理解・援助を試みたパイロットスタディである。

このプロジェクトへの参加者は、ホームレス女性２人（28歳、36歳）と住宅住まいの３人（67歳～86歳）であった。これらの参加者は人口学的クライテリア（年齢、民族、居住条件）、豊富な情報を交換できる潜在可能性などでノミネイトされている。高齢女性の居住条件は一人暮らし、高齢者用住宅居住、家族との居住である。選定の基準は彼女たちに似た女性の保健・居住ニーズの理解に貢献できる度合いで、参加者はすべて匿名で扱われた。

インフォームドコンセントの後に、地域の教会で７ヶ月の間に５回の会合が開かれた。第１回のインストラクションでは被写体についての指示は最低限にし、住居・近所だけでなく、働き、つどう場所も撮ることを勧めただけだった。参加者には最初から①あなたの好きなもの、場所、人は何か、②あなたの生活に重要なインパクトを与えるものごとは何か、③あなた方（参加者）に共通するものは何か、という３つの問いが課せられていた。フラッシュつきのインスタントカメラが準備された。

毎回の会合では研究者がファシリテーターとなり、参加者が最も重要、最も好きな写真を選んでフリーディスカッションを行なった。また、研究者も議論を盛り上げるために、写真を選んだ。選ばれた写真はスライドにして、集団で見ることによって、対話が弾み、自分の写真との比較・対比が可能となった。議論は毎回、録音、筆記された。毎回の会合を臨床心理士が監視し、集団化プロセスを円滑にして、議論が痛みや大きな争いを起こさないようにした。

以上、この研究の方法的な留意点は、①参加者を予想されるディスカッションに合わせて絞り込んでいる、②参加者の匿名性を確保した、③被写体の指示を最低限に抑えている、④撮影にあたって問いを課した、⑤研究者がファシリテーターとなった、⑥臨床心理士を参加させた、⑦写真をスライド化してグループ討議や相互比較を容易にした、である。

５．Wang によるPhotovoiceの方法論

Photovoiceについて文献検索した結果、提唱者Wangの関与したものしか見つからなかった。そこで、今まで紹介してきた、Wangの主要論文からその方法論について現段階でのまとめをしておきたい。

Photovoiceでは統計的分析を行なわない質的な方法であるので、参加者はランダムサンプリングで選ぶのではなく、グループディスカッションの内容を想定して選択すべきである。ただし、様々な視点からの写真を確保するために、参加者の偏りを避けたり、家族や隣人による写真を採用するなどの工夫も必要である。インフォームドコンセントを行ない、匿名性を確保することも必要となる。参加者を有意抽出することによって結果の信頼性が失われるという懸念に関しては、グループディスカッションに多種多様な人々が参加し、様々な視点から論議することによって保証されると考えられる。

参加者には事前にカメラのメカニックについて訓練を行なうが、被写体の指示や技術的な助言は最低限にして、独創性が発揮できるようにする必要がある。ただし、写真のテーマが拡散しないように問いを課す工夫も重要である。この点に関して、最近の使い捨てインスタントカメラの普及はメカニックの訓練を不要としたと考えられる。

撮影された写真のグループ討議は、支持的な調子で進めることが必要で、このためには研究者などが外部ファシリテーターとして参加することが重要となる。場合によっては参加住民の内部ファシリテーターや臨床心理士のスーパーバイズも有効である。議論を活発にするためには、スライドにして視覚的インパクトを高めること、異なる地域の写真も討議することなどの工夫が重要である。物語化のためには問いを発することも有効である。物語のついた写真は、展示によって“声”をひろげ、参加者が地域プレゼンテーションを行なうことによって、政策化が容易になる。また、写真はプロジェクトや活動、事業のアウトカム評価に活用できる。

Ⅲ　Community Assessmentとしてのphotovoiceの試み

—沖縄県離島における高齢者のNeeds Assessment—

１．対象と方法

離島における高齢者の様々なニーズを把握し、住民のコンセンサスを得る方法として、Photovoiceの応用を試み、Needs Assessment としての応用可能性を検討した。Photovoiceの参加者は、沖縄県今帰仁村の古宇

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

利小中学校３年生以上35人（古宇利島）、粟国村の粟国小中学校４年生以上58人（粟国島）で、24枚撮りのインスタントカメラを学校を通じて配布・回収した。小中学校の総合学習への活用も考慮して、古宇利島では「古宇利の好きなところとおじいちゃん、おばあちゃん」、粟国島では「高齢者のゆとりのある暮らし」という、比較的広いテーマを採用した。写真は小中学生に自選２枚を選んで「ボイス」をつけてもらうとともに、当該地域を担当する保健婦にも高齢者の生活の質という視点から「ボイス」を付与してもらった。

さらに、撮影された全写真について、高齢者の保健・福祉・介護にかかわる関係者、PTAなどのグループでワークショップを行ない、高齢者の保健・福祉・介護上のニーズを抽出し、その解決策を討議した。

２．検討結果

（１）子どもが参加することの長所

各グループのワークショップを通じて、Photovoiceに子どもが参加することの利点として、①子どもが撮影することで警戒感をいだかず、高齢者のありのままの姿が表現できる（**写真１**）、②高齢者の生活する様々な場面に入り込むことができる（**写真２**）、③低いアングルから環境をとらえることができる（**写真３～４**）、④既成の概念枠にとらわれずに眺めることができる（**写真５～６**）、⑤グループ討議において撮影者を意識せずに発言できる、などが考えられた。

なお、各写真につけた「ボイス」は、子どもたちの自選の写真については子どもたち自身の「ボイス」、選ばれなかった写真については子どもたち以外の「ボイス」の例として筆者のものを付与している。後者のように、グループ討議に参加する様々な人々ひとり一人が「ボイス」をつけることによって課題を発見し、積極的に発言できるようになる、と考えられる。

（２）子どもが参加することの限界・制約

一方、子どもが参加することでの制約として、①子どもの行動圏に限界がある、②肖像権についてのインフォームドコンセントが難しい、③研究上の限定したテーマに合った写真が少ない、④子どもの「ボイス」は解決策に直接にはむすびつかない、などが考えられたので、今後、改善・配慮していく必要がある。肖像権の問題は、グループ討議には撮影者だけでなく、写された人々も積極的に参加し自らも「ボイス」をつけることや、他地域との写真による相互交流を推し進めることによって解決できると考えられる。

（３）Community Assessment 手法としての評価

子どもによるPhotovoiceは、Community Assessmentの手法として①子どもが（その多くは）無意識に撮影した写真から参加者が質的なものを抽出することによって質的・定性的な診断となり得る、②参加者の「ボイス」付与、グループ討議の過程を通じて解決に向けた動機づけがはかられる手法である、③住民や専門家の様々な形態での参加が可能である、④住民によるニーズの掘

写真１　おばあちゃんの笑顔がかっこいい（小３男子のボイス）

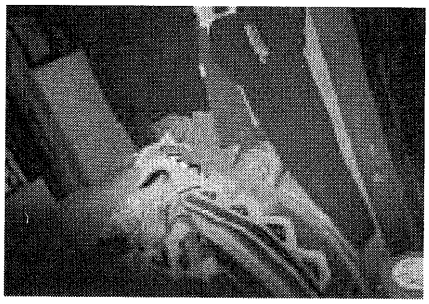

写真２　おじいちゃんのみる夢は?（筆者のボイス）

写真３　この段差が歳をとるとなんとも辛い（筆者のボイス）

写真４　どこへ行くにも坂の昇り降り（筆者のボイス）

写真５　車椅子と杖では島の生活は大変（筆者のボイス）

写真６　おばあちゃんがお茶を前にして、飲もうと笑っている（小６女子のボイス）

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

り起こしが可能である、などの特徴をもつことが考えられる。とくに参加の受け皿となる住民組織がない、あるいは不活発な場合にも、小中学校の総合学習とタイアップできるので、有効な方法であると考えられる。

Ⅳ　Photovoiceの応用可能性

Photovoiceは質的・定性的な診断手法として、統計的指標による定量的なCommunity　Assessmentと並行して行なうことによって、相互に補い合って診断の精度を高めることが可能になると考えられる。また、定量的なCommunity　Assessmentによって把握された課題をテーマにPhotovoiceを行なうことで、住民参加がより活発になると考えられる。

Photovoice本来のねらいである社会的弱者の社会参加という点からは、例えば、インスタントカメラの操作が可能な高齢者自身によるPhotovoiceや、高齢者の代弁者としての、介護を担当している高齢者の家族によるPhotovoiceを通じて、住民自身の手による問題解決を推進する、という応用が考えられる。

なお、本研究は三菱財団社会福祉事業・研究助成「介護保険の導入に伴う保健・福祉の変化とサポート体制に関する総合的研究」の一部で、沖縄県の事例は第66回日本民族衛生学会総会（沖縄）で口頭発表した。

文　献

1）C. C. Wang, Y. L. Yuan, M.L. Feng : Photovoice as a tool for participatory evaluation: The community's view of process and impact, Journal of Contemporary Health, 4(3), 47－49, 1996

2）C. Wang, M. A. Burris : Photovoice: Concept, Methodology, and Use for Participatory Needs Assessment, Health Education & Behavior, 24(3), 369－387, 1997

3）C. Wang, M. A. Burris : Empowerment through Photo Novella: Portraits of Participation, Health Education Quarterly, 21(2), 171－186, 1994

4）C. Wang, Wu Kun Yi, Zhan Wen Tao, K. Carovano: Photovoice as a participatory health promotion strategy, HEALTH PROMOTION INTERNATINAL, 13(1), 75－86, 1998

5）C. M. Killion, C. Wang : Linking African American Mothers across Life Stage and Station through Photovoice, Journal of Health Care for the Poor and Underserved, 11(3), 310－325, 2000

NII-Electronic Library Service

Okinawa Prefectural College of Nursing

Journal of Okinawa Prefectural College of Nursing No. 3 March 2002.

A first trial of Photovice for participatory Needs Assessment in the villages of isolated islands, Okinawa

Okamura Jun, M.H.S.[1] Kinjo Yoshihide, D.H.S.[1]

Photovoice is the participatory action research approach proposed by Wang, in which people can take photographs with specific intentions, add their voices to them, share the community's problems through group discussions and find the active solution finally. As the results of methodological reviews, photovoice in practical settings should be considered in terms of five points as follows: (1) to select participants who can communicate the matter in content, (2) to collect photographs from various aspects, (3) to give minimum instructions and advice to the participants, (4) to conduct group discussions in supportive manner, (5) to transfer the selected photographs to slides and use the photographs from other communities. According to present photovoice trials in two villages of isolated islands, Okinawa, the results were summarized as follows: (1) to be a qualitative assessment, (2) to be an action research approach, (3) to be participated by various people, (4) to elucidate the potential needs. The results suggest that the photovoice was an effective method even if neither active nor autonomous as supportive group activity in communities exist.

Key word: Photovoice, Citizen Participation, Action Research, Needs Assessment

1) Okinawa Prefectural College of Nursing

NII-Electronic Library Service